

出エジプト記3章11〜15節、ルカ福音書20章27〜40節

モーセは奴隷の家に生まれたヘブライ人でした(2章13節)。ヘブライ人というのは当時、イスラエル民族のことを意味していませんでした。そうではなく、外国からエジプトに移住してきた人々のことで、奴隷として強制労働に駆り出される階級の人たちを指す総称でした。彼らはエジプトで奴隷のように働かされていたので、エジプトではアピルと呼ばれ、メソポタミア地方ではハビルと呼ばれていました。モーセは幸運にも当時のエジプト王ラメセス二世の娘に拾われて王宮で育てられました。大人になって自分が奴隷の民の子であることを知り、同胞であるイスラエル人に対して暴力的な労働をさせているエジプト人を衝動的に殺してしまいます(2章11〜12節)。おそらく、王女に養母として雇われた実母によって、自分がヘブライ人であることを知らされていたのでしよう。こうして、ヘブライ人としてのアイデンティティが支配者側のエジプト人として生きていくことを妨げさせたのです。その結果として生じた殺人行為ですが、そのことがエジプト王の耳に入り、東のミディアンの地に逃亡します。そこで祭司エトロの娘ツイポラと結婚し、子どもも生まれて牧羊者としての生活を送っていたのです。

1

長い逃亡生活の中で平凡な日常性に埋没し、舅の家畜を飼う遊牧民として平凡な生活をしていました。ただ、心の深いところでは、息子をゲルシヨムと命名したことをみても分かるように、「わたしは異国にいる寄留者(ゲール)だ」という自意識を持っていたのです(2章21〜22節)。モーセは結婚していて、子どももいて、遊牧民の生活になり切っていたのですが、実際には異国で受容されない寄留の生活をしていることを十分に自覚していました。しかし一方で、彼がアイデンティティを持っているヘブライ人にも受け入れられません。エジプトで抑圧されているヘブライ人たちは過酷な状況下にありましたので、現実の奴隷状態から脱出して自由人になろうというような意識を持ち合わせていませんでした。抑圧されている彼らの意識のあり方が、自由を勝ち取ろうという意識に変わるような兆候は全くなかったです。

そこには日々の生活を無事に送ることができれば御の字だという奴隷に甘んじる意識しか持ち合わせていませんでした。モーセが同胞のヘブライ人が鞭打たれているのを義憤にかられて殺したあとも、相変わらずにヘブライ人たちは仲間同士で喧嘩をするだけで、モーセのことも個人的な殺人者としてしか認識し

ていません。彼らに民族自決の意識や差別状態からの解放を目指す意識は皆無だったのです。このような奴隷意識は抑圧者の差別意識を被差別者自身が内面化させてしまったために生じるものです。抑圧された人間が常に抑圧の構造を的確に把握しているとは限らないのです。強力な専制君主国家は、いろいろな技術を独占し、高度で圧倒的な軍事力を背景に無言の圧力でもって、反乱を企てるような気持ちを封じ込めてしまうのです。さらには官僚的な支配体制が整備されていることによって抑圧構造が維持され続けます。また、時代精神も権力側によって都合の良いかたちに占有されています。けれども、これらの抑圧構造が見えなければ、抑圧されている人たちは自分たちを抑圧している権力に反抗するような気持ちになることもなく、エジプトの圧倒的な権力の前にぬかづくしかないわけです。

ですから、このような奴隷意識からヘブライ人たちを脱出させることは当初、モーセにとっては不可能なことと思えたことでしょう。しかも、長く抑圧されてきたヘブライ人たちをエジプトから脱出させ、さらには彼らを核にして新しい民族共同体を創出することはほとんど不可能なことと思えたはずです。

しかし、神はそのようなモーセを召し出すのです。ミディアンの地に逃れてからかなりの時間が経って、モーセがシナイ半島の神の山ホレブ（聖書ではシナイ山と呼ばれる。現在のジェベル・ムーサ（標高2285m）アラビア語で「モーセの山」だとされる）に来たとき、ヤハウエから召命を受けるのです。²

おそらく、モーセがかつて絶対的権力を持っていたエジプトの支配権力の内側にいたことが大きく影響していると思われます。しかもその抑圧下で生きるヘブライ人に対するアイデンティティを持っていたことも彼が神に選ばれた原因でしょう。しかし、何よりも神がモーセを召し出したのは、出エジプトをする際の指導者として、エジプトの抑圧構造を知りつくし、ヘブライ人を導く上で一度挫折を経験していたことも神の目からみて適していると判断されたのだと思われます。それは指導者として、出エジプトの困難さを自覚する意識を持っていたからです。

このときヤハウエという名がモーセに啓示されたことが、エジプトで奴隷状態にあったヘブライ人たちの脱出につながりました。この出エジプトをした人々がシナイにおいて、ヤハウエを神として受容することによって、後に形成されるイスラエル民族の核となったのです。本日のテキスト（3章1〜15節）の召命記事では、2節で柴の間に燃え上っている炎の「中に」主の御使いが現れたとあるように、モーセが目で見たとしたのは、柴の間から燃え上っている「火（エシユ）の炎」（原文）であり、その「火の炎」の中に主の御使いが現れたのです。乾燥した草木の発火は自然現象としてありえることですが、そこに神が現れた

のです。モーセが注意深く見ると、『柴は火に燃えているのに、柴は燃え尽きない』不思議な現象に気づくのです。人間は燃え尽きても神は燃え尽きることはないことを象徴しているのです。

その燃え尽きない神がモーセに新しい使命を与えるのです。それは出エジプトという40年もかかる難事業の開始にふさわしい出来事だったのです。ここには、イスラエルの神、聖書に証しされている神の姿がよく描かれています。燃える柴から語りかける神は言われます。「ここに近づいてはならない。足から履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから」(5節)。ここだけ見ると、神は人間からかけ離れた遠い存在のように思えます。しかし、同時に、このすべてを超えた大いなる神は、人間の痛みを知ってくださる神であり、神の民の叫びに耳を傾けて下さる神なのです。私たちは、ときどき、神は自分の悩みを何も分かってくれていないと思ってしまう。イスラエルの民もそうでした。しかし、実はそうではなかったのです。神は御自分の民の苦しみをすべてご存じであり、深い同情と憐れみを寄せておられたのです。その神がついにモーセを選んで、モーセに現れてくださった！イスラエルの神は苦しむ民と、挫折して逃亡生活をしていたモーセと共にいます神であったことがここで判明したのです。

12節を見ると、『わたしは必ずあなたと共にいる』(キー・エフィエ・インマーヒ)のエフィエ(わたしはある)は、神の名を示すだけでなく、救済の約束をも示しており、「私は必ずあなたを助ける」³

という意味です。モーセと共にいるという約束は、具体的には「神の意志・計画をモーセの考え方に適合させる」ことです。神はモーセという人間に、「ご自身の意志と言葉を委ねるといふ、ある意味で「賭け」を選択しているのです。ですから、14節で『わたしはある。わたしはあるという者だ』(エフィエ・アシエル・エフィエ)と語って、さらには『イスラエルの人々にこう言うがよい。「わたしはある」(エフィエ)という方がわたしをあなたたちに遣わされるのだ』と語り、ヤハウエという名が人間存在を、神の意志にふさわしい形で存在ならしめる方だと言うのです。簡単に言えば、召し出した者を神の意志に沿わせるというのです。でも、先ほど「賭け」と言ったように、人間の側の自由意志を尊重しながら、神の意志に沿う形で導くのです。そこに、神の救いの約束が実現していくのです。神の声を聞いた者が人間としての主体性を發揮しながら、その人らしい人生の歩みをなしていくのです。その先鞭をつけたのがモーセという人物であり、失敗からスタートした人間を用いるという神の選択があったのです。私たちも人生で失敗を繰り返したり、困難な状況に直面します。けれども、神はそのような人間を御自分の意志に沿う形で召し出し、その人らしい人生へと導くのです。